

こわれる・くずれる

齊藤永子

1. はじめに

「こわれる」と「くずれる」は、ものが損われるということを表わすところが類似している。破損することを表わす語には、「砕ける」「割れる」「くずれる」「こわれる」「やぶれる」「つぶれる」などいろいろあるが、ここでは「こわれる」と「くずれる」を取り扱う。少し考えてみても、「こわれる」の方が「くずれる」よりも大きな意味領域を持っているように感じる。「くずれ」たり、「砕け」たりすることがまとめて「こわれる」といわれるように、「くずれる」は「こわれる」のひとつの破損の型であるとも考えられる。私はこの二語を考察していくにあたって、まず対象を考えることによって、領域をしっかりとらえようと思う。そしてその中で両方の語が使われる対象については、そこでの違いを考えてみることにする。

2. 分析

「こわれる」と「くずれる」のそれぞれの対象を考えるにあたって、破損することを表わすいろいろな動詞の中でこの二語が表わし得る対象の大枠を定めてみようと思う。

○形のあるもの、形があると考えられているもので、ある程度立体的なもの、立体感のあるもの

○一般的に観念でかたまりとしてあるいは形のあるものとして、とらえられている抽象的なもの

「波が こわれる(くずれる)」のように、液体でも形があるという感覚でみられている場合には用いられる。「きれが こわれる(くずれる)」とは言わないで、「やぶれる」などを使うように、布や紙など厚みのない対象物では「こわれる」「くずれる」は用いない。

上に定めた大枠はおおざっぱなものであるが、これを土台にして具体的に考えてみようと思う。

2.1. ものが破損されるときに機能が失われる場合

- (1) 時計が こわれる。
- (2) × 時計が くずれる。
- (3) おなかが こわれる。
- (4) × おなかが くずれる。
- (5) コップが こわれる。
- (6) × コップが くずれる。

これらはどれも、全体かそのもの的一部分かが役に立たなくなった、あるいは機能が衰えたか失われたかしたという意味である。「時計」の場合は 形のそこないが外見にあらわれる時と、そうでない時とがある対象物で、他に「ラジオ」「オモチャ」などがある。「おなか」の場合は、外見的には破損がみうけられない対象物で、他に「体」「肩」などがある。「コップ」の場合は外見的にもそこなわれる対象物で、他に「いす」などがある。ただし、これらの「時計」「コップ」は積んであるものではなくて、ひとつのものがそこなわれる時であることを付けたしておく。

このような意味(形のそこないがある・ないにかかわらず、機能が失われる)において、「くずれる」は使われることはないのだろうか。

- (7) トンネルが こわれる。
- (8) トンネルが くずれる。
- (9) 壁が こわれる。
- (10) 壁が くずれる。

これは、外見が損われ、機能も失われるという「コップ」などと同じ意味である。しかし、これらは「こわれる」「くずれる」の両方に用いられ、「くずれる」だけが使われる対象物ではない。これらの外形のそこなわれ方が、後に述べるような「くずれる」という型であるため、「くずれる」が使われるのである。たまたま「トンネル」や「壁」という対象物が破損される場合に機能にも関与したというだけのことである。

これらからわかることは、機能が衰えるとか失われる、役に立たなくなるという意味は「こわれる」にあるひとつの大切な意味であるということである。

2.2. 整った状態が乱れる場合

- (11) × 姿勢が こわれる。
- (12) 姿勢が くずれる。
- (13) × 服が こわれる。
- (14) 服が くずれる。
- (15) × 字が こわれる。
- (16) 字が くずれる。

ある形をかたちづくっている物質の秩序がなくなっていく程度に、きちんとしたものが乱れるという意味である。このような場合には「こわれる」は用いられず、

「くずれる」を用いる。

2.3. 形がそこなわれる時（機能関与なし）

2.3.1. 「こわれ方」「くずれ方」のちがい

(17) ×積もった雪が こわれる。

(18) 積もった雪が くずれる。

(19) シャボン玉が こわれる。

(20) ×シャボン玉が くずれる。

形がそこなわれるとき、ものはいろいろな形のそこなわれ方をする。その有様の違いによって、その時に使われることばもいろいろちがってくる。「積もった雪」の形のそこなわれ方を表現する語が「くずれる」であり、「シャボン玉」の形のそこなわれ方を表現するのが「こわれる」なのであろう。いちおうここでは、それぞれの形のそこなわれ方を「こわれ方」「くずれ方」といい、その特徴について考えてみることにしよう。

シャボン玉の「こわれ方」は、「シャボン玉が われる」とも言えるように「われる」という有様である。「こわれ方」というのは、他の語で言うと、「われる」とか「くだける」という破損のされ方をする。「こわれる」対象物の破片がいろんな方向にバラバラになって散るのである。これに対し、積もった雪の「くずれ方」はどうだろう。積もった雪が、何かの拍子でバランスを失って、変形したという意味である。「くずれる」対象物をかたちづくっているひとつひとつのものが、結びつきを失って、なだれおちたのである。

「こわれる」と「くずれる」は破損される時の物質の散り方の方向が違い、「こわれる」が割合四方八方に散るのに対して、「くずれる」は重力の向きにバラバラになる。

(21) おそなえ餅が こわれる。

(22) おそなえ餅が くずれる。

(21)の場合は、餅にひびがはいったり、欠けたりして本来の姿をそこなったという意味である。これに対して(22)は、三つ積んであったおそなえ餅が何かの拍子で安定がなくなり、ころがり落ちて、形がそこなわれたという意味である。ここでの二文の意味の違いも、上に述べた「こわれ方」「くずれ方」によるものだと思う。「こわれる」を用いる対象物は、それ自体としてひとつのものであることが多く、「くずれる」の場合ある個々の物質がかたちづくっているひとつの物が対象物である場合が多い。そして、「こわれる」では、その対象物が破損される場合、形づくっている物質それぞれのつながりが強いいため、対象物は「破片」というものに

なる。それに対し、「くずれる」では、形づくっている物質それぞれのつながりが弱いので、破損されると、対象物は比較的小さなかたまりか、それを構成している一個一個になる。

2.3.2. どこを重視しているかの違い

(23) つみ木が こわれる。

(24) つみ木が くずれる。

(25) 雪だるまが こわれる。

(26) 雪だるまが くずれる。

(27) 砂の山が こわれる。

(28) 砂の山が くずれる。

これらの例は「こわれる」も「くずれる」も両方使うことができる。しかし、状況を限って考えてみると、片方しか用いられない場合がでてくる。

(29) ×いちばん上に乗っていたつみ木が、振動で こわれた。

(30) いちばん上に乗っていたつみ木が、振動で くずれた。

これは一個のつみ木が上から下にころがり落ちていく様子を「くずれる」と言っている。「こわれる」は、ここでつみ木が割れてしまわない限り用いない。一個のつみ木がころがり落ちるという有様を「くずれる」というのなら、それを二個としたらどうか。それも「くずれる」というであろう。三個でも言えるし、四個五個でも言える。もちろん大部分がころがり落ちることも「くずれる」と言えるであろう。そうすると、(23)(24)の差は何にあるのか。「くずれる」はつみ木一個一個がころがり落ちていく有様を重視しているのに対し、「こわれる」はつみ木でつくったひとつの形がなくなってしまうことを重視している。今まで表わしていた形が失われたということを強調するのが「こわれる」という語なのである。「砂の山」や「雪だるま」も同様である。「砂の山」がげんこつなど強い力で激しく破壊された時には「こわれる」と表現し、太陽の熱で砂が乾き、風の方でサラサラと形がそこなわれていく時には「くずれる」と表現する。そういう形の「こわれ方」「くずれ方」の違いもあるが、「こわれる」が全体の形の変化を重視しているのに対し、「くずれる」が形のそこなわれる過程・有様を重視しているという違いもある。

2.3.3. 抽象名詞について

(31) イメージが こわれる。

(32) イメージが くずれる。

「イメージ」という語は抽象名詞である。形のないも

のであるから、それだけに私たちの頭の中でいろいろな破損の状況を作り得る。そのため、「こわれる」も「くずれる」も使われやすい。他に「夢」などがある。

(33) 彼に対するイメージは こわれた。

(34) 彼に対するイメージは くずれた。

もし、「彼に対するイメージ」が、とてもすばらしく、理想的で、美しく、完璧なひとつの形となっているものなら、それは、「くずれる」より「こわれる」ものであろう。もし、「彼に対するイメージ」が、彼と私との長いつき合いの中のいろいろな出来事によるひとかけらひとかけらで作っていったものだとしたら、それが破壊される時は「こわれる」というより「くずれる」と言えるだろう。2.3.1.や2.3.2.で言っていることは、抽象名詞についても言えるのである。

(35) 形が こわれる。

(36) 形が くずれる。

(37) 体調が こわれる。

(38) 体調が くずれる。

これらの例の「くずれる」は、2.2.と多少似ている。「くずれる」の場合は、物質の秩序が保たれている範囲内で、物が乱れているという意味である。「形」や「体調」の乱れ具合が小さいと「くずれる」で、大きいと、「こわれる」を用いているようである。これらは同じ抽象名詞でも「イメージ」などとは違う「こわれる」「くずれる」の使い方をする。「イメージ」「夢」は、2.3.1.や2.3.2.で述べたように、「こわれ方」「くずれ方」の違いや、形を重視してるか、有様を重視してるかのちがいで、「こわれる」「くずれる」を使いわけられる。けれども、「形」や「体調」では破壊される度合で区別される。

2.4. 派生的用法

(39) お金が こわれる。

(40) お金が くずれる。

大きな単位のお金を、同額の小銭に替えるという意味である。この意味は辞書では「くずれる」の方にしか載っていないが、両方用いられるように思う。

(41) 縁談が こわれる。

(42) 縁談が くずれる。

これは「こわれる」の派生的用法で、話・約束ごとがだめになる意味である。

3. まとめ

- こわれる (1) 機能が衰えたり、失われたりすること。
(2) 整った形が乱れる意は含まない。
(3) こわれ方については、対象物を構成しているものが、破壊され、バラバラに散って、ひび割れたり欠けたりして、いくつもの破片(かたまり)となること。
(4) 完全な形をもったものが、その形を失ってしまうこと。(形の変化に視点を置く。)

- くずれる (1) 機能に関与するか、しないかは関係ない。
(2) 構成している物質の秩序を狂わすことがない程度にものが乱れること。
(3) くずれ方については、対象物を構成しているひとつひとつのものが、バラバラになっところがり落ちること。
(4) 形が破損されていく有様・状況をいう。(過程・有様に視点を置く。)

言語経歴：0歳～7歳宮崎市 7歳～9歳
立川市 9歳～18歳船橋市
18歳～ 所沢市

やぶる・やぶく・さく・きる・わる

嘉悦真理

1. はじめに

一つのをいくつかに分割・破壊する場合に、私たちはいくつかの動詞を無意識のうちに使いわけている。身辺でよく行なわれる動作であるだけに、しばしば口にしてはるが日頃は迷いや混乱を覚えずにその場にふさわしい動詞を選んでいる。では、その動

詞をその場に最もふさわしいものにしていくポイントは、どこにあるのだろうか。「やぶる・やぶく・さく・きる・わる」を取り上げて、そのポイントを探してみたい。